

---

parallel gate -the sorcerer legend-

氷面上 悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

parallel gate - the sorcerer legend -

### 【Nコード】

N3336U

### 【作者名】

氷面上 悠

### 【あらすじ】

異能を宿す高校生、池上蓮いけがみれんの元に現れた謎の少女ミスト。彼女との出会いが蓮の運命を大きく変えてゆく！  
少年は自らの運命にどう立ち向かうのか？  
いい感じに中二っぽいファンタジー

## プロローグ 雨が示す異界への旅路

雨。

梅雨にもなれば結構な割合で降っているので気分が沈む。

ただでさえダルい高校生活に追い討ちをかけるかのように、今日も雨は降り続く。

「はぁ……。こうジメジメしていると何もやる気しねえわ」

このとおり、俺 いけがみれん 池上蓮 は雨が大好き嫌いだ。

しかも今日に至っては傘を忘れてきている始末……

「とりあえず走ってコンビニまで行こう……」

雨宿りするなり、傘を買うなりはそれから考えることにしよう。

そして俺は雨の中をやる気なさそうに走るのだった。

雨の中を走ってコンビニまでは行ったものの、持ち合わせがなく傘は断念。

雨が弱まるのを待つことにしてから15分、余計に勢いが増している。

「さすがにもう待てねえ……」

早々に挫折し、ものすごい土砂降りの中を走っていく。

雨に濡れてどんどん服が重くなっていく。

「ああああもう！ なんだよ！？ 止めよこの野郎！！」

なんて愚痴りながらもとにかく走る。

すぐ傍の路地を通り抜けてショートカットしようとしたのだが……

「おいテメエ、ちよいと待てや」

何故か急に肩を掴まれ、呼び止められる。

「何だ？ 俺早く帰りにえんだけど」

俺がダルそうに振り向くと、そこに立っていたのは近くの高校の

制服を着た明らかに不良らしき三人組だった。

「んだよその態度は、フザケてんのか……」

あゝまた変なのが出てきたもんだ。

とりあえずは深く関らない方がいいんだけどなあとか思っている  
と、急に後頭部を何かで殴られた。

勢いで前のめりに倒れこむ。

「つてえなあ……」

思い切り地面とキスしたせいで口の中がジャリジャリする。

ついでにどうやら頭から血も出ているっぽい。

「ハッ、いい気味だ。調子に乗るなよクズが!!」

頭がクラクラする。

とにかくムカつく。

こいつらもだが、何より雨が。

「早く降りてえって言ったんだけどなあ……」

未だにぼやけた思考のままゆっくりと立ち上がる。

「なんだコイツ？ まだ立つのかよ」

だがこいつらはまだ気付いちやいない。

俺の周りの”水”が奇妙に揺らいでいることに

「チッ、そこで寝とけよバカが!!」

そう言っつて鉄パイプで殴りかかってきた不良に向かって軽く手を  
振るっつ。

その瞬間音もなく鉄パイプが真っ二つに切断され、不良の頬が軽  
く切れる。

「っ!？ なんだよこれ……」

周囲の水分の制御。

俺が小さな頃から持っている奇妙な能力……

「あゝイライラする……。もう帰っていいか？」

「何しやがったテメエ!？」

「え、何？ まだやるの？」

次に向かつて来たやつは手に小型のナイフを持っていた。

「今度はマジで殺す気かよ……」

俺はさっきと同じ要領でナイフをバラバラにする。

「なっ、何なんだ、この化物は……!?!?」

完全にビビッて後ずさっている不良たちの一人が怯えながら口を開く。

「そ、そういえば、聞いたことがある……。雨の日に現れて、チンピラをことごとく病院送りにしてるヤツの話……」

そいつはハッキリと俺を見てこう言った。

「お、おお前が、ブラッディレイン血塗れの雨……」

すっごい嫌な名前が飛び出したので、俺はあからさまに顔をしかめる。

「ヒイツツ!?!?」

誰が言ったかはわからないが、それを皮切りに不良たちは全力疾走で逃げていった。

「……もういいや、帰る」

一目散に逃走した不良たちを尻目に俺は家へと帰った。

## 血塗れの雨

何故かついてしまった俺の二つ名。

理由は単純明快。

今日みたいなことが雨の日に度々発生するからである。

「あゝ、またやっちゃった……」

というか見たまんまにも程があるだろうとたまに思ったりもするのだが、毎回血を流してるのも事実だったりする。

ちなみに今は便利なのか不便なのかよくわからない例の能力で傷口を止血してある。

「ってかマジで頭痛てえ」

とりあえず適当にシャワーを浴びて部屋着に着替える。

「もういいや、寝よ」

と、そこでインターホンの音が鳴る。

「はいはい、どちらさま？」

気だるげにドアを開ける。

するとそこにいたのは

「んーと、君が私の契約者だねっ！ いや、クロスオーバー異界交錯体って言うべきかな？」

なんかとてつもなく電波なことを言う美少女だった。

「え、いや何？ くるすおーばーってなんなの……？ てか誰！？」

「ん？ とりあえず追々説明するから、まず私と契約しよっ」

あれ、なんか悪徳商法っぽい感じで俺押し切られそうになってる？  
明らかに説明をするステップをすっ飛ばされたんだが……

「ちよつと待て。何だお前、さつきから……というか初っ端から意味がわからん」

「ちつ、やつぱ勢いじゃだめかあ」

「勢いだったのかよ！？ で何なの、ちゃんと説明してくれ……」  
文字通り頭が痛い。

今日の一件もあるが、それ以上にコイツの言動を理解するのにフル回転させた脳が。

「んじゃとりあえず、何かあったかい飲み物が欲しいなっ。それがら話す」

なんて超笑顔で一方向的に自分の欲しい物をカミングアウトしやがった。

「……絶対今日厄日だわ」

そんなこんなで我が家のリビング。

奇妙な言動の少女と俺の二人きり……

とりあえずココアを入れたのだが、妙に気に入ったのかグビグビ飲んでいたりする。

「ぷはっ。美味しかった」

口の周りにココアがものすつごい付いてたりするが、あえて無視する。

さっきまでは気にしなかったがコイツ、容姿もかなり奇異なのである。

全く癖のないセミロングの青い髪。

吸い込まれそうな深青色の瞳に絹のように白い肌。

ハッキリ言って超絶美少女なのだが、御伽噺の中から出てきたような違和感がある。

それに服装もどう考えてもコスプレっぽい感じなのである。

あちこちに切れ目の入ったキャミソールに、左側だけが少し長いレースだらけのスカート。

右腕の二の腕辺りからバンドで固定してある着物の袖のようなもの。

ゴツいベルトに、左手の中指にはミサングのような飾り紐……

あげく、長さも柄も違うソックス 片方は膝下、もう片方は二  
ーソックス の上からショートブーツを履いていた。

俺がげんなりしている理由の一つはコレにある。

「お、なにになにつ？ この服が気になるの？」

「変なトコ鋭いなあお前……」

「む、お前じゃないよ、ミ・ス・ト・リ・ア。ミストリア・アーヴルロア、それが私の名前」

いや、初耳だよ、んなことは。

「んで、そのミストリアさんは俺に何の用な訳？ ついでにお前口の周りすげえぞ」

途端にミストリアは顔を真っ赤にしたかと思うと、傍にあったティッシュで乱雑に口を拭った。

「……っ別に気付いてなかったんじゃにやいもん……」  
なんか焦って微妙に囁んでいた。

「そ、それはいいとして！ 私の目的の話ッ！……」

「お、おう」

結局めちやくちゃ話が長かったんだが、要約するとこんな感じ。  
まず、彼女が異界から来たこと。

そして、その異界が危機に晒されていること。  
彼女が4柱と呼ばれる守護者の一人であること。

危機を食い止めるために契約者が必要で、それが彼女の異界交錯  
体とかいうよくわからんものである俺だつてこと。

ここに来たのはその契約をするためらしい。

それにしても中二感溢れる説明である。

「ある程度事情は理解した。でも俺はちょっと変かもしれないがただ  
の高校生だぞ？」

「それは大丈夫。あなたが普通なのはこっちの世界だけ」

「どういう意味だ？ それと、俺は若干だが世の理を逸した力を持  
ってるから普通とは言いがたいぞ？」

「へえ〜。ま、とりあえず契約だよ。そうしないと話が進まない」

「その契約とやらに何かのリスクは無いんだろうな？」  
「そこが重要だ。もし契約に失敗して、はい死にましたーじゃ洒落  
にならない。」

「ん、大丈夫。リスクは全く無いよ。ただ私とキスするだけ」

ああ、そうキスかあ。

なら問題……大アリだあああああつ!?

「待て待て、ちょっと待て！ お前はいいのかそれで!？」

「だ、だって覚悟ならもうとつくにしてきたし……。でっ、でも初  
めて」

あれ、ヤバイ。すっごく気まずい。

完全に空気が死んだ。

「でも、あれだ、勢いでやっちゃえばダイジョブだよきつと!！」

「気でも狂ったかお前!? なんかナンパしてる酔っ払いのおっさ  
んみたいな事言ってるぞ!？」

「でっ、でも、もうそれしか無いのおおおおっ!！」

言っが早いのか、ミストリアはいきなり俺に飛びつき、そのままキ



スしてきた。

「っ！？」

喋るに喋れないので無理やり引き離そうとしたのだが、力が入らない。

それに首の辺りが妙に熱い。それも徐々に熱くなってるみたいだぞ。

しかも息苦しい。何秒間キスしてんだコイツは！？

必死にもがくが全く事態が好転しない。

「っん、はあああ……」

結局俺が退けるよりも先にミストリアが離れた。

「ほい、終わった！ やってやったぞ私！！」

「てか首が痛いッ！？ ちよっ、何これヤベエ！！」

キスされている間に徐々に熱くなっていた首がそれはもう焼けるように痛い。

「ま、仕方ないね。契りの刻印を刻んだんだから痛いに決まってるよっ」

「それを先に言えやああああアッ！！」

俺は床をのた打ち回りながら絶叫していた。

「ま、まあもうすぐ治まるから大丈夫だって」

アハハとか苦笑いしながらミストリアは告げてきたのだが、本当に痛みはすぐに治まった。

「お？ ホントに治まった。てか、刻印ってのは見えるのか？」

「うん、見えるよ。ほい鏡ね。ついでに私のことは長いからミストでいいよ」

手渡された鏡を見てみると、確かに首に刺青のようなものがあった。

首の周りをぐるりと一周しているっぽいそれは、よくわからない文字の羅列のようだった。

「これって、隠さないとマズくね……？」

「あ、そっか忘れてた！ どうしよ、首だとチョーカーとかかな？」

「ん？ ああ、そうかな。そんなので隠せるならだけど」

さすがにこんなのでうるつくとロクな事にならない。主に今日の  
ような事件がまた起こりかねん。

「こんなのでいいかな？ 気に入らなかつたら自分で調達してね」  
そういつて渡してきたのは飾り気のあまりない白い革製のチョー  
カーだった。

「いいんじゃないか？ それはそうと、お前何でさつきから顔背け  
てんの？」

「えっ！？ いや別に大した事じゃっ」

「まさかお前、今更ファーストキスを捧げた事を後悔してるんじゃない  
ぶげごばあッ！？」

なんか唐突に蹴りが飛んできた。

それも正確に俺の顔めがけて。

「余計な事を思い出さすなあああアッ！！??」

「ちよっ、落ち着け！ それ以上はやめろって!!」

「ど、どうせっ、あなただっで初めてだったくせに!!」

「待て待て！ 怒んなって。てか俺は初めてじゃねえぞ？」

決して人に話すような事じゃないし、思い出すと辛くなる。

俺の初めてはその人との最後の思い出になってしまったから

だが暴れるのを止めたミストは逆に怒りに震えていた。

「だ、誰、相手は誰なのっ!？」

「だから落ち着けて。俺のファーストキスを奪ったのは……俺の、  
姉さんなんだ」

「えっ……? どういうことなの、それ。だっでこの家にはあなた  
しか」

「両親は俺が10歳の時に死んだ。姉さんは、2年前に行方不明に  
なっただよ……」

もう思い出さたくもない記憶。

突然いなくなっでしまった、たっただ一人の家族。

俺の中3の夏

雨が降る中、思い詰めたような顔で俺にキスをして出かけた姉さんはそのまま行方不明になった。

見つかったのは雨で濡れた荷物と傘、そして血が付いた腕時計だけだった……

「そうなんだ、なら、私と同じだ……」

「どういう意味だ？ お前も両親を亡くしてるのか？」

しかしミストは首を横に振った。

「違うよ……。私は村ひとつ、家族も親友もみんな」

慰めの言葉すら出なかった。

その言葉すら彼女を傷つけてしまいそうで、自分の悩みさえちっぽけに思える程の大きな傷。

「そうか……」

そう一言しか言うことが出来なかった。

でも、決心は出来た。

ここで止まっているんじゃなく前へ進む。

こんな俺でも役に立てるのなら、もう一度頑張ってみてもいいんじゃないだろうかって気がした。

「じゃ、とりあえず出発しようか。学校とかは戻って来てからなんとかするから」

「ん、おけ。んじゃよろしく頼むよ、相棒！」

「あ、相棒かあ……。うん、それもいいかもねっ。んじゃ門ゲートを開くからちよつと離れてね」

そう言うとミストはポケットから紙と小さな針を取り出し、紙に血文字でなにやらよくわからない文字を書き込んでいく。

「よし、準備完了！あとは詠唱だけだね」

俺には全くわけがわからんのだが、どうやらここで魔法か何かを使うようだ。

《開け、異なる理の世と世を繋ぐ門よ》

そうミストが唱えるとさっきの紙から光る渦のようなものが現れる。

「これをくぐるのか？」

「そうだよ。座標はマーカー1088、東の庵ね」  
そうすると渦にぼんやりと風景が浮かび始める。

「じゃ、行くよっ！」

ミストに手を掴まれて、俺も門に飛び込む。

この日、俺達の物語は動き始めた

## T a l e 0 1 白き森の漆黒

門をくぐった俺達は目的地に到着……否、落下した。

「ぐへらっ!? なんで床なんぐボエ」

床に落下した俺をミストが踏みつけるといふ最悪の形で。

「てめえ、ワザとやってるのか!？」

「ん? たまたまだよ、偶然偶然」

多少は謝罪をしてほしいものである。

「んで、ここが目的地か？」

「そだよ、東の庵。私の家、そんでもってこれからしばらく運もここで暮らすの」

なんか前もって調べてたのか、コイツは当たり前のように俺を名前で呼びやがった。

「そういえば俺は何をすればいいんだ? 何ひとつ分かつちやいな  
いんだが」

「そだね、まずはこの奥の森で修行かな。単独だけど死なないように注意してね」

「……………は？」

待て待て、理解が追いつかないぞ。

え、何? 死ぬってどゆことおツ?!

「言葉そのままの意味だよ。一応危機的状況になったときの為に転移用霊装は渡しておくけど」

「修行ったって魔法も何もわからないのにどうしろと!？」

「え? ああ、魔法は全部インスピレーションだよ。自分の魔力で物質や世界に満ちてる魔力に干渉するだけ」

「じゃあ呪文は？」

「閃きで」

「魔法陣は!？」

「思いつきでっ」

俺は思いっきり頂垂れた。

「マジかよ……」

「ホントだよ。簡単なのなら三歳児でも出来るし」

「じゃあ門を開いたのもアドリブなのか!？」

「あゝ、あれはちよつと違うの。昔から継承されてたりするものは決まりがあつたりするよ？ でも殆どは個人の創作」

「どうやら俺は自力で魔法を習得せねばならんようだ。

しかも現地で……」

「ちよつと簡単なのやってみるから見てて」

そういうとミストは人差し指を突き出し小さく唱えた。

《灯れ、篝火》

「わお……」

ミストの指先には小さな火が灯っていた。

「ね、簡単でしょ？ 自分でイメージ出来るなら何でもいいんだよ。

逆に全く想像出来ないのはいくらやっても無駄」

「なるほどねえ。ま、少しずつ頑張ってみるよ」

こうして俺は森へと繰り出したのだが

なんか白い。

木から草から何から何まで真っ白。

「さすが異世界……。でも一応聞いとくか、魔法の練習がてら」

頭の中でイメージを固め、右拳を頭にあてて唱える。

《繋げ、言の葉》

すぐに変化が起こる。

糸電話のように自分と相手を繋ぐ感覚。

「あーあー、聞こえるか？ ミスト」

返事はすぐにあつた。

「おお、ちゃんと聞こえてるよ。しかし念話の魔法とはいきなり高度だねえ。」

「これってそんな難しいのか？ それよりこの白い森は何なんだ？」

『むう、難易度で言えば下位の魔導師レベル。森が白いのは聖域の結果の影響』

「下位の魔導師で、それ自体どのレベルかわからんがな。とりあえず先へ進んでみる」

そう言つて念話を切る。

「どうやら俺は結構優秀らしい。

」さてと、さくつと修行してきますかね」

進み始めて数分、最初の敵とエンカウント。

なんか蛙っぽいやつ（全長約3m）

「いや、デカ過ぎだろ！？ 何だコイツ、しかもこの感じ絶対人喰うだろ」

蛙モドキの口内にはズラリと牙が生えていた。

「洒落にならねえ。とりあえず一発やってみるか」

逃げながら右手でピストルの形をつくり、唱える。

《雷雨》

右手に発生した稲妻がマシンガンのように蛙モドキに飛んでゆく。

「大体イメージ通り。上手くいけば倒せるハズ」

が、予想を完全に裏切った結果が待っていた。

喰いやがった。

稲妻の銃弾を1つ残らず蛙モドキは喰ったのだ。

「しかもダメージ0かよ!？」

咄嗟に近くにあった小石をいくつか掴み、投げながら呪文。

「篝火の応用、効くかどうかわかんないけど」

《爆ぜろ、劫火》

まあ結果は同じく小石を喰われて終わるはずだった。

しかし、俺の思いつきが功を奏した。

小石を喰った蛙モドキが爆炎を撒き散らしながら爆ぜたのである。

「あれ、なんか倒せた?」

結局あまり実感もなく敵を撃破。

「一応報告はしとくかな」

《繋げ、言の葉》

簡単に唱えると再び念話が繋がる。

「とりあえずなんかやつつけた」

『そうなの！？ どんなやつ？』

「なんか食人蛙みたいなの」

『ああ、それグレゴリイだね。中級の魔獣の中でも結構ヤバイやつなんだけど、よく倒せたね』

「確かに見た感じも実際もヤバかったがな。あと何時間ぐらいやればいいんだ？」

『もう今日は時間も時間だし帰ってきていいよ。念話に地図を流すから、それに従って帰ってきて』

「ん、それじゃ帰るまで念話は繋ぎっぱなしな」

しばらくして頭の中にぼんやりと地図のようなものが浮かんできたので、それを基準に歩き始める。

「しっかしこの森も物騒だよなあ」

『それくらいのほうが修行にはいいでしょ？』

「はいはい、そうですね」

ひたすら進む。

進行方向に嫌なものが見えたのはその直後だった。

「何だよ、これ……」

一面白い森だけにやけに目立つ赤黒い何か。

「何でこんなに血が……」

『多分、魔獣同士の殺し合いか何か。あまりいい気はしないけど』  
血溜まりの先にそれは居た。

全長5m程の2頭の狼。

だが、1体の胸には明らかに致命傷と思しき穴が。もう1体は頭が無かった。

全身にべつとりと血が付き、もはや何色の毛並みだったのかすらわからない。

「こんなのを殺れるのがいるのかよ……」



恐らくこの狼は1頭でもさっきのグレゴリイよりも強い。  
そんな狼の亡骸に1頭の黒っぽい子犬らしきものが身を寄せてい  
る。

「まさかコレの子供か？ サイズが大分違うが」

俺が近づくと、子犬は俺に駆け寄り寄ってきて怯えるように縋りつい  
た。

「どした、大丈夫か？」

言葉が通じる訳も無い。

酷く吐き気がする。

本能が血の臭いに危機感を抱かせているのだらう。

《ギョルルゲルゲエ》

唐突に気味の悪い声が聞こえる。

ゾクリと悪寒に襲われ、咄嗟に子犬を抱えて真横に跳んだ。

直後、俺の居た場所を巨木のようなものが貫く。

そこから辿って見たのは、蜘蛛やらクワガタやらカブトやら様  
々な虫をごちゃ混ぜにしたような化物だった。

「オイオイマジかよ！？ 本気で洒落になってねえ！」

『どうしたの蓮！？ 何かに襲われてるっ？！』

「残念なことに大正解だこの野郎ッ！ 巨体の狼2頭も殺つちまう  
ような馬鹿デカイ虫に襲われてる」

『何それ、そんなの見たことないよ？！ とりあえず念話から座標  
割り出して私がそつちに飛ぶから、それまで死なないで』

「無茶だろオイ！！ でもなんとか持ちこたえるしか……」

ポケットに手を突っ込み、小石をいくつか取り出す。

「頼む、効いてくれよ」

《爆ぜろ、劫火》

化物にあたった小石が爆発して炎を撒き散らす。

「ちよつとは効果あったか？」

結局は炎が爆ぜた辺りが少し焦げているだけで殆ど効果がなかつ  
た。

「マジかよッ！！　ならこれはどうよ!？」

今度は木の枝をあるだけ握り、違う詠唱を行う。

《我が手に矢を、放つ矢に光輝を》

同時に枝を投擲する。

瞬時に枝は光を纏い、化物に突き刺さる。

《ギョルリリアア》

奇妙な悲鳴を上げて仰け反る。

「ちよつとは効いたみたいだな。それに、なんとか時間稼ぎ程度の役には立つたみたいだし」

「うっん、あのレベルの使い魔に手傷を負わせられれば上出来だよ」

颯爽と降り立ったミストの手には、一振りの巨剣が握られていた。

「ホントは剣つて得意じゃないんだけど」

一気に化物の上空まで跳んだミストは剣を振りかぶりながら詠唱を行う。

《風を纏い、一太刀にて魔を両断せよ　風絶一文字》

強烈な突風が吹き荒れ、土が巻き上げられる。

風が止んだところでトンツとミストが着地した。

「東の魔女の領地に土足で入った罪は重いよ？」

視界が戻り、見えたのは大地ごと両断され、灰のように崩れる化物だった。

「一撃かよ……」

「アハハ、蓮にもこのぐらいになってもらわないとね」  
先は果てしなく長そうだ。

結局その後は何事も無く庵へ帰還。

「ところでその子犬何？　すっごく可愛いんだけど！」

目をキラキラさせながら俺に聞いてくる。

「なんか巨大な狼が倒れてたところにいたんだよ。んで何故か懐いた」

「へえ、お手とかできるかな？」

俺の足元にいる子犬にそーつと手を出すミスト。

何をしていいのかよくわからなかったのか、ミストの手を少し舐めた。

「はうううう……」

物凄い幸せそうな顔をしていた。

「で、どうする？ 飼うのか？」

「ん〜、ってちょっと待った！？ もしかしてこの子……」

「急にどした？」

「いやもしかしてじゃなくて確実にそうだよこの子！」

「だから何よ？ 一人でわーわー言われても分かん」

「蓮が見た狼の死体、それクロガネオオカミだよ！！ だから多分

この子、その子供だ」

「つまり子犬じゃなくて子狼だってか？」

するとミストはブンブンと首を横に振り、真剣な顔で俺に告げた。

「クロガネオオカミって絶対に人に懐かないんだよ。霊獣の中でもトップクラスの知能と戦闘能力を持つてるし」

「つまりは奇跡だと？」

「そうだね、奇跡としか言いようがない。でも重要な戦力にはなってくれるかも。成長すればきつと古代魔術エンシェント・スペルも使えるだろうし」

「はあ、専門用語が多すぎて殆ど分からんがとにかくお前凄いな」俺の足元でうろつろしている子狼を撫でてやる。

「気持ちよさそうに鳴くところをじつと見つめてくる。」

「ん？ なんかおかしいと思ったらコイツ、オッドアイじゃねえか！？」

「え、嘘、ホントに？ どんだけレアアニマルなのよ……」

ミストはもはや驚きを通り越して呆れていた。

「そういえば、名前とか決めてあげないの？ いつまでも名無しじゃ可哀想でしょ？」

切り替え早えよ！！ と言いかけて止める。

ああ、もういいよ飼いたいなの、もうめちやくちや顔に出てるよ。

俺は俺で違う意味で呆れつつ、適当にそれっぽいものを模索する。

「えっと、フェールなんてどうだ？」

「何それ？」

「フランス語で鉄、つまりクロガネって意味だよ。姉さんが好きだった言葉」

「ふうん……悪くはないかも。でも何でフランス語？」

「んなコト俺が知るかよ……。というより鉄って言葉が好きだったんだと思うぞ、言う度に言語変わってたし……」

ある時はイタリア語、又ある時はヒンディー語、たまにどの言語かわからないのもあった。

鉄のように強く在れ。

うちのご先祖様が家訓として残した言葉らしいが、姉さんはえらく気に入っていた。

むしろ、俺がフェールってフランス語を覚えてたのは、姉さんの付けていた時計のメーカーの名前がフェールだったからだろう。

「もしかしてさ、嫌なこと思い出すような内容だった……？」

ミストは話を聞いた後になって申し訳なさそうな顔をしていた。

「……そうかもな。でも、俺がコイツにそんな名前を付けようと思っただのは、どこかでまだ姉さんが生きてるって思ってるからなのかもな」

自虐的な笑みを浮かべ、俺はミストにそう言った。

どこかで、きつとどこかで。

それでも思っていないと何かが壊れてしまいそうで、何かに救いを求めているのかも知れない。

それはこの世界か、あるいはミストなのか、それとも他の何かなのか

「フェール」

そうさつき付けたばかりの名前で子狼を呼んでやる。

反応しないかとも思ったが、意外にも即座に俺の傍に駆け寄ってきた。

「ほう、優秀だねえ。私、明日この子のご飯も買ってくるね」  
相変わらずミストは幸せそうな顔をしていた。

「ま、ちよっとは楽しくなるかね」

「ちなみにフェール、女の子だから。この庵の中だと女性有利だね  
っ  
」

「ああはい、そうですか。あんまり虐めるなよ、泣くぞ」

「アハハ、蓮つてば弱虫だなあ」

孤独だった2人と1匹の人生が、少しずつ温かさ持ち始めたよう  
な、そんな1日に思えた。

## T a l e 0 2 道化は来たりて嘘を吐く

異界へ渡り、早々に修行を開始して死にかけた日の夜、事件は起こった。

ミストがさつさと用意して（主に魔法的な何かで）完成した夕食を食べ、一番風呂に入っていた矢先だった。

「ふう、疲れがとれるわあ〜」

やけに広い浴槽、檜風呂のように全面が木の壁、ちょうどいい温度のお湯。

完璧だった。誰が何を言おうと完璧だった。

「にしても使い魔ってことは誰かがここに攻めてきてたって事だよな」

そう、俺が遭遇した虫の化物。

ミストの話だと、契約者を悟られないような細工までしてあったらしい。

相当な手馴れの犯行のようだったらしく、侵入経路すらほとんどわからなかったようだ。

「俺も本気でやんないとそのうち殺されるな……」

真剣に決意を固めたり考え事をしていたちよつどその瞬間。

「蓮、湯加減はどう？」

「ん？ ああ、ちよつどいいぞ ってあれ、今隣からミスト

の声があったよな？」

「あ、ホントだっ 適温適温〜」

当然のように湯船の中に奴はいた。

「な、なななな、な、何やってんだよお前はああアツ!？」

一応補足しておくが、言うまでもなく全裸である。

「ほへ？ お風呂に入ってるんだけど？」

「いやそうということじゃなくてだな、お前に羞恥心はないのか?!」

「ん〜 変なトコ触られたりとかしなれば」

キスは慌てて裸は見られても大丈夫ってどういう事だ!?

いやいや、これは何かの罠だ。ホントは魔法で作った幻覚だよとかいうオチに決まってる、そうに違いない!!

「だとすればやるべき事は1つ!」

「何が?」

俺は勢いでミストに抱きついた。

「ひゃうつ!?!? れ、ん?」

あれ? 何故だ、軟らかいぞ。

すべすべした肌、適度に膨らんだ胸、紛れもなく”女の子”の感触。

やべえ、死んだ。確実に殺される。

「蓮、やっぱり、辛い? お、お姉さんの代わりにはなれないけど、私なんかでいいなら、その……」

完全に死を覚悟した俺に、ミストは赤らめた顔でそんなことを言うてきた。

「……キレたりしないのか?」

「へいき、これぐらいなら。だって、辛いのはみんな一緒、私も、フェールも、蓮も」

どうやら運がよかったのか、いい感じに勘違いしてくれたようだ。ただし罪悪感がすごい。

「悪かった、急に抱きついたりして。でもその、ホントにお前見られる分には恥ずかしくないのか?」

ミストから離れてそう聞く。

「ちよつとは恥ずかしい。でも裸なのは蓮も一緒だから」  
一応羞恥心はあって安心した。

色々なことで盛大に焦ったせいで俺はダラダラと変な汗が出まくっていたが。

「ま、そういう問題じゃない気もするがな」

「そのかわり、その、私も、ぎゅってしていい?」

半ば呆れつつ言った俺にそんなとんでも発言をしてきた。

「正気か？ 正気なのか！？ 本っ当に俺なんか抱きつきたいと？！」

「だって蓮だけズルイ……」

「ごめんなさい、反論出来ません。」

「わーっただよ、ちよっただけな。俺が気絶しない程度にお願いします」

「？」

意味が分からんという顔をしていたが、ミストはそのまま俺の胸に顔を埋めてきた。

「っ……」

何これ、すごいきゅんときたんですケド。

目をぎゅっと瞑り、俺に抱きついているミスト。

ヤバイ、胸の感触があっ！！

「えへへ、蓮、どきどきしてる？」

「なっ、いや、そりやでもえつと……」

「アハハ、恥ずかしがってる蓮も好きだよ。そろそろ離れるね」

ドキドキしすぎたのか、湯に浸かり過ぎてのぼせたのかわからないが、意識が飛びそうになった。

「くそ、不覚だ。危うく意識を持っていかれそうになった」

「そんなに興奮したの？」

「断じてそういう訳ではない！ ただのぼせそうに」

「じゃ、明日から毎晩やるねっ」

「鬼だ、鬼がいるッ！！」

しかもこいつわかってやってるよ、確実に確信犯だよ！？

「待て、毎晩だと！？ せめて服を着てから」

「じゃあ寝る前と起きてからもぎゅってするねっ」

墓穴掘ったあああああああああああッ！！！！

セクハラだ、セクシャルハラメントだ、性的嫌がらせだあああああー！！！！

「ごめんなさい、マジ勘弁してください」



「やだ。だって蓮で遊ぶの面白いし」

そう言いながら俺にダイブしてきたミストの脚が、あるところか俺の股間にクリティカルヒット。

「ふおおっ……」

気色の悪い声を出しながら俺は湯船に沈んだ。

しばらくして目覚めると、ベッドの上だった。

何故かちゃんと服も

「っつて一体誰がっ!？」

「私しかいないでしょ。それにしても男の子の体ってあんなふうに

「

嫌ああああああああああああアッ!! 見られた、触れられた、辱められたああアアアアッ!？」

絶叫していた。

もう全身全霊、魂の叫びだった。

「アハ、お風呂場から運んだりするの大変だったんだからね。明日は背中を流してもらおうかな」

「もうどうにでもなれ……」

いちいち反応していたら精神が持たない。

結局、この夜のハグは本当に実行された……

翌朝、目を開けると眼前10cmのところにミストがいた。

「うおあ!?! 今度は何だ!?!」

「おはよう、蓮っ」

そのままハグ。

正直理性が飛びそうになるのだが、紙一重で耐える。

「マジで日課にするつもりなのか……」

「当然だよ。色仕掛けに惑わされて裏切られるのはヤダし、ちょっとした耐性を付けるの」

「クッ……、そのうち世の男共に殺されそうだな」

「ま、裏切っても、コ・ロ・ス・ケ・ド……」

「怖っ！？ マジだろ、マジで殺す気だろ！？」

「ニコリ」

完全に瞳孔がカツ開いていたので余計な事は言わない方が良さそう  
うだ。

いくらなんでもDEADENDは避けたい。

「で、今日も修行か？ 昨日みたいな化物はもう御免だ」

「いやあ、私も最初はそのままでも大丈夫だと思ったんだけどね。  
でも状況が変わった」

さつきとは裏腹に真剣な顔のミスト。

恐らくここからは大分重要な話だと直感が告げている。

「蓮には先に霊装を一式揃えてもらう。最悪使い魔退治が出来るよ  
うに」

「おい、俺にいきなりあんなのと戦えつてのか！？」

「素手とその辺の物だけでグレゴリイを倒せたのなら十分だって  
確かにそうだが、あの使い魔とやらはその比ではなかった。

正直今の俺の手には負えないレベルの敵だった。

「本音を言つとね、蓮を評価してたでしょ？ あれって実際はちょ  
っと違うの」

「何が違うってんだ。俺はあの使い魔にはほとんど太刀打ち出来な  
かったんだぞ？」

「でも、あの評価は霊装一式をフルで装備した魔術師でのランクな  
のよ！？ 本当なら高位魔戦兵か私みたいな魔女と同等の力を使え  
ても不思議じゃない！！」

「どういうことだ……？ 霊装ありなら、俺もそれなりに戦えるの  
か！？」

「うん、それなりなんてレベルじゃない。順調にいけば、私なんか  
よりよっぽど」

役に立てる……のか？

俺なんか、何かを守る力があるっていうのか？

姉さんさえ守ることが出来なかった俺が……

「正直私も驚いてるの。蓮の潜在能力がここまでだとは思わなかったし、私の計測にそこまで誤差が出るとも思ってたなかつた」

「計測に誤差つて何の事だ？ 魔法を使う素質みたいな物の事か？」

「まあ、そんなとこ。でも、私が蓮の魔力や魔術適正を計測した時は、辛うじて上級魔術の行使が可能なレベルだった。」

「で、実際は？ 俺はそこまで高度な物を使った覚えはないんだが……」

森で俺が使ったのは凄く簡単なイメージの物ばかりだった。

小石を爆弾にしたててみたり、枝を光の矢に変えてみたり……

思い当たるとすれば、少なくとも俺は全てを霊装なしで行っていたという事。

「蓮がああ使い魔に使った枝の魔法ね、あれ、荒いとは言えレベル的には中級攻撃魔法なの。」

「それを素手で使えたつてのが誤差？」

「そうだね、素手で中級魔法が使えるなら、霊装があれば上級魔法が連発出来るような実力があるつてことだから」

でもなんで認識がここまでズレたのかわからないとミストは頭をふつた。

クロスオーバー

異界交錯体である俺を見つuckerける事さえ手間取ったと言うのだ。

そもそも、本当ならあっさり見つかるはずの俺が見つからなかった時点で少しおかしかったらしい。

「でも、原因は私にもわからなかった。まるで蓮が何かに存在を薄められて、隠されているみたいに……」

「隠す、ねえ……。でもまあ、今は気にしても仕方がない」

「そうかもね。じゃ、とりあえず今日は素材の収集と買い物かな」

そうして、俺は初めてこの森の外へ出る事になったのだが

「おい待て、俺はどうやってこの森から出ればいい！？」

「そりゃ、走るとか？」

「ちゃっかり自分は魔女らしく箒に跨ってそんなことを言う。」

「いや無理だから。何自分だけ飛んで行こうとしてる訳？」

「ん〜じゃあ蓮も箒使ってみる？」

「どうやら箒自体はいくつかあるらしい。」

「まあ、箒で空を飛ぶなんて発想が滑稽だが。」

「まずは試してみるべきかと思うぞ？ 最悪無理なら要望通りに走ってやんよ」

「で、箒の使い方をレクチャーされ、乗ってみることになった。」

「簡単な霊装だから、ちよつと魔力を流すだけで動いてくれるはずだよ」

「ああ、要は微調整ってことだろ？」

「箒に跨り、浮かぶイメージを少しずつ送り込む。」

「元々そういうふうに練った魔力を受け取りやすく作られているとかで、あっさり成功した。」

「お、成功……か？ とりあえず浮かぶことは出来たぞ」

「上出来〜。じゃ、行こうか！」

「そのまま少しずつ高度を上げ、木々の上に出る。」

「そこから直線的に街のような場所に向かって飛んでいく。」

「これ結構楽しいな！ 思ってたより簡単だし」

「ま、蓮ならそのぐらい出来ないと困るよ」

「そのまましばらく飛んで街の外れに着地。」

「ほい、到着つと〜。ここからは歩きね」

「箒はどうするんだ？ さすがに持ち歩きはしないよな？」

「あ〜、ちよい待ち」

「そういつて小さな黒い巾着をポケットから取り出す。」

「そのまま巾着を開け、その中に箒を入れてしまった。」

「何……だつ！？」

「アハハ、このぐらいで驚かないの。圧縮魔法がかけてあるの」

「いろいろ便利すぎだろ、ホントにゲームの世界みたいだな……」

「ミストは俺の分の箒もそのまま巾着に入れる。」

「よし、じゃあ行こうか！」

そのまま街の方へ歩き始める。

なんでもミストの説明によると、さっきの巾着のような魔法処理を施した簡単な物を魔道具。

魔法を強化、安定させたりするためのアイテムを霊装と言っらしい。

今から作る霊装は俺が自作せねばならんらしい。

「ホントに作れんのかね、そんな大層なモン」

「大丈夫だよ、私も手伝うから。こればかりは適当には出来ないし」

そう言ってミストは入った店で次々とよくわからない物を買っっていく。

宝石みたいな石だったり、金属の延べ棒のような物だったり、怪しげな小瓶だったり……

最後の店でもよくわからない物を買う。

「あ、それとこれ、あと頼んでたアレを」

アレって何だよ!?

何故か昔やったえらく大変なRPGを思い出す。

最初の装備を調達するのに素材が数百個いるようなゲームで、開始から数分で挫折した。

「大体揃ったのか？　ここで最後だっって言っただけど」

店の奥から店主が持つてきた丁寧に布で包んだ箱を受け取り、ミストは俺に言っ。

「うん、俺にあるのと……あとは森の奥で調達すれば足りるかな」

「そうか、じゃあ残りは戻っってからっ事だな」

来た道を引き返し、そのまま俺が帰ろうとしている時だった。

ジワリと何かが視界の端で滲むような感覚。

今までも何度かあつた感覚。

そう、まるで魔法を使うためにそこらの魔力に誰かが干渉しているような

「ヤバイ、避けるッ!!」

「へ? 何、きゃっ!？」

そのまま逃げるようにミストを突き飛ばしながら自分も横に避ける。

石畳が吹き飛んだのはその直後だった。

大量の石の残骸が撒き散らされる。

「あつぶねえ! 一体どこから!？」

「やっぱり私達を狙ってるヤツはいたみたいだね。蓮の判断に助けられたよ……」

土煙の中、唐突にその声は聞こえた。

「なアんだ、よけチャウのオ? ツマンナイんだけどオ」

軽薄そうでいて、どこか底冷えするような恐怖を伴う男の声。

「アハハハははハッ! びびッチャツた? すぐに死ぬカラ関係ないけどさアツ!!」

直後に飛んできたのは数十本の錆びたナイフだった。

「何だよアレ!?! 間に合わ」

直後に聞こえたのは澄んだミストの声だった。

《絶空壁》

俺達に飛んできていたナイフが目の前で不可視の壁に阻まれて潰れる。

だが、潰れたナイフはドロドロと気味の悪い液体に姿を変え、さらにこちらへ追撃を加えようとする。

「やっぱり呪具の類だったかあ。危ないね、街中でそれを使うのは私としては許しておけないんだけど?」

「きとひ、さすがは東の魔女オ! 見破るノモ速いし対処も速イね」  
相変わらず男は壊れたラジオのようにケタケタと笑う。

「マ、護衛は期待ハズレだなア。ソナ餓鬼にナニガ出来るの力なア?」

俺は言い返す事すら出来なかった。

今の貧弱な俺にミストを守るなんて事は到底不可能だろうし、ま

してやコイツを倒すなんて事は出来るハズもない。

「そんなコト言えるのも多分今のうちだけだよ。蓮は私以上に素質があるから」

俺の心境とは裏腹に、ミストはこんな事を言った。

「きヒツ、馬鹿げてるねエ。嘘ハそこそこシナイとさア」

「ま、余裕の表情のままやられちゃえばいいよっ」

俺の隣から一気に男に接近する。

そのまま小さなナイフを取り出し、男の胸の辺りに向けて何かを放つ。

《静寂に還せ、キリサメ斬雨》

男に放たれた魔法が、その体を一瞬でズタズタにした。

「キ、ききケケケケケケカカキキツツツ!!!?????」

ガタガタと男の体が震えだし、さっきのナイフのようにドロリと崩れ始める。

「呪いは無駄だよ。さっきのは解呪の効果もあるから」  
男の体は結局そのまま形を失い、崩れて跡形もなく消滅してしまつた。

「なんだよ、一体……。まるで付いていけなかつた」

「だいじょぶだよ、これから頑張ればいいんだし。それにしても木で偶くなんて、用心深いなあ」

襲撃されたのは二度目。

相変わらず俺はまるで役に立たなかつた。

「それはそうと、蓮は何で攻撃が来るってわかつたの？」

「ああ、いや実はこつちに来てからなんだけどな。魔法を誰かが使つてると目に何か映るといふか、景色が滲んだり何かの形に見えたりするんだよ。」

その話を聞くなり、ミストは本気で驚いた顔をした。

「目までいいのかあ。それはちよつと羨ましいかも」

後で聞いた話だと、人には魔力との親和性に個人差があり、たまに魔力の揺らぎや魔法の発動式が見える人がいるのだとか。

俺はどうやらそういう体質らしい。

「俺ってば恵まれてんのな……」

「そうかもね。さてと、霊装頑張っ作らないと」

その後、夜中まで採集やら加工を行ったのだが、恐ろしく作業が複雑で死ぬほど疲れた。

ミスト曰く、『そんな簡単な霊装じゃ蓮の力を100%引き出すのは無理だから』だそうだ。

そして昨日なら夕食を食べていたであろう時刻を過ぎた頃

「でつきたあ　最後は蓮が核コアを組み込めば完成だよ！」

「お、おう。これをここに入れればいいのか？」

俺が別口で作っていた霊装の核と呼ばれるものをいくつかはめ込む。

なんでも、使う霊装の設定は自分でしなきゃ駄目だそうで、本と格闘しながらやっと完成させた。

「うん、いいんじゃないかなっ！　大体私のイメージ通り。武器も蓮のイメージ通り？」

「ああ、あとは機能が上手く動けばいいんだよな？」

作業台の上にはゴツゴツした装飾やらポケットが大量に付いたズボンとフード付きのロングコート。

ミストのキャミソールのようにあちこち切れ目に入ったシャツ。

霊装や魔道具なんかを入れる革のベルトが腰用に1本、肩からかけるものが2本。

「服の方は完璧だよ。性能的には私のと変わらない程度かな」

そして白と黒の2本の魔杖。

全く同じ形の杖は一体の蛇竜が巻きついていてるデザイン。

ところどころに蒼い宝石のような物がはまっている。

ケリケイオン。

それがこの杖の名前だった。

思いつ切りゲームからひっぱってきた名前だったのだが、イメー



ジがすっかり持てる名前の方がいいとのこと、そのまま決定になった。

「よし、とりあえず飯にしようぜ。腹減った！」

「アハハ、そだね。で、ケリユケイオンにはどんな機構を付けたの？」

「もちろん秘密」

「え〜！？ いいじゃん、教えてくれても」

「見てのお楽しみってコトで。さあ飯だ飯い」

そしてこの日も更けていったが、襲撃者の男のことは頭から消えなかった。

### Table 03 ファーストコンタクト

霊装が完成してから数日、俺は毎日のように特訓に出かけた。

当然のごとく、武器があるのとないのでは大違いで、何度か大物を倒したこともあった。

だが、例の男の情報はまるでなく、襲撃もあれ以来途絶えてしまっている。

「おっはよー 今朝は何するか憶えてるよね？」

めちやくちや迷惑なことに相変わらずミストのハグだけは続いている。

そして今日はちょっとした重要な日なのである。

「ああ、東の神様に会いに行くんだっけか？」

そう神。

ミスト達4柱が何故特別かということの理由。

こっちに来てからしばらくして聞いたのだが、どうやらミスト達はそれぞれ四方の神様との親和性が非常に高く、唯一その恩恵を受けることが出来る存在なのだとか。

わかりやすく言えば、自身の才能に上乗せで神の力の一端を振るう事が可能だということ。

俺みたいな異界交錯体クロスオーバーというのは、その4柱と魔力の波長が寸分の違いなく同じ人間の事らしい。

俺達が交わした契約というのは、俺達にもその神の力が使えるようにするためのものだったらしい。

「少し奥の方まで行かなきゃならないから急ぐよ〜」

「へいへい、神様って一体どんなだろうな……」

いつものように服を着替え、装備を一つ一つ確かめる。

「欠落はなしつと。準備出来たぞ」

最後にコンバットブーツを履き、準備は完了した。

「それじゃ行こうか。筈は？」

「いや、いい。俺は杖があるから」

「ん？ そういえばそっか。随分上手くなったしねっ」  
ケリュケイオンに付けた機能。

それは形態変化というシンプルかつ複雑なものだった。

《囁け》

起動コードを呟くと、首のネックレストップの片方が白い杖になる。

「にしても面白いよね。魔術に合わせて杖の形そのものを変えちゃうなんて」

「基本面倒くさいのが嫌いなんだよ俺は。十得ナイフとか考えた人はすごいと思う」

「アハハ、確かに荷物を大量に持ち歩くのは面倒だよね」  
そのまま空を飛び、森の奥へと向かう。

その先に見える青白く光る場所がある。

「あそこが目的地、東にある天ノ御柱だよ」  
降り立つと、そこは広大な魔法陣のようなものだった。

「ここでどうやって神様に会うんだ？」

「ちよつと待ってね、準備がいるから」

そういつとミストは自分の指先を少し切り、そこから流れた血を一滴魔方阵の中心に落とした。

「前も思ってたんだが、傷口、大丈夫なのか？」

「平気平気っ このぐらいはすぐに塞がっちゃうから。神様の魔力は偉大ってコト」

どうやら神様とやらの魔力が、かなりの治癒力を与えているようだ。

その少し後に、陣の中心に裂け目のようなものが開き始めた。

「うわっ、なにこれ!？」

「大丈夫、この先に神様がいるの」

そう言ってミストは裂け目に入ってしまった。

「マジかよ……」

渋々俺も後を追う。

俺が反対側に着地したのと同時に裂け目が閉じる。

裂け目の先は一面が真っ青の空間だった。

「うわぁ、目がチカチカする……」

見渡す限り果てしなく青。

だがそこに異形の神は佇んでいた。

「久しぶりだね、アーヴルロア」

《久しいな、契約者よ。そして初見だな、代行者よ》

神々しくもあり、どこか冷えきった威圧感がある声だった。

この世界の主として存在している神は、龍に似ていた。

蛇のように長い胴に水晶の様なものが重なり合って出来た翼。

その紺碧の体には水のヴェールをいくつも纏っている。

「これが、東方の神……」

《いかにも、我が東の神アーヴルロアじゃ。ふむ、危機管理能力は

優秀なようだなにより》

「アハハ、蓮は直感だけは人一倍鋭いよねえ」

「おい、だけはって何だよ！？ てか、何かしにきたんじゃないの

か？」

「何言ってるの、挨拶だけだよ？ それに蓮の試験はもう済んだで

しょ」

「いや、まだ何もしてないが……」

本当にまるで何もしてないのに終わり！？

いや、何事もないこと以上にいい事もないが……

《なに、我が汝を認めた事は汝の命が一番の証明じゃろう》

「簡単に説明すると、もし不合格なら蓮は殺されてたってことだね

っ

「何とんでもないこと満面の笑みで言ってたんだバカ！」

結局その後も何事もなく終わり、俺へ帰ることになった。

「あゝ、緊張しすぎて損した……」

「でもいい情報は貰えたじゃない？」  
そう、いい情報。

俺達を狙っていた男のことをアーヴルロアは見つけていたのだ。  
「にしても、さすが神様って感じだな。どうする、今日のうちに仕掛けるか？」

「うん、それがいいかも。よからぬコトを考えてるみたいだし」  
そうして、例の男の討伐作戦が決行されたのだが

「じゃ、頑張つてね蓮っ」

「俺だけかよ！？ え、ちょ、俺だけなの?!」

何故か俺だけでやってこい的な流れになっていた。

「ここはいつちょ力試しのな？」

「何故疑問形！？ まあ、どうせちゃんとした理由があるんだろうけどさあ」

「ご名答とばかりにミストはニヤニヤとした嫌な含み笑いを浮かべ、そのまま庵へ入ってしまった。

「はあ、行く前から不安だったの」

結局一人で向かった先は一軒のボロ家だった。

「……もう突っ込む気力さえ残ってないんですケド」

溜息を吐きながらドアを開けて侵入すると、その先はいかにもダンジョン的な古びた洋館のような場所だった。

「いや、予想はしてたけどね。多分感じからしてこの間の巾着に似た魔法がかかってんだろ」

そのまま進んでみたものの、まるで生物の痕跡がない。

本当に人がいるのか疑いたくなるほど不自然に俺の足跡だけが埃まみれの床に残っていく。

奥へ、奥へ

進めば進むほど生命力が薄くなっているような感覚。

だが、最深部の部屋だけが違った。

その奥にだけ強大な魔力が満ちているのである。

「とうとうラスボスってか？　ま、それ以外つても気が抜けるが」  
そして最後のドアを開ける。

その先に見えたのはロッキングチェアとそれに座る一人の老人だった。

「アンタなのか、俺やミストを襲ってたのは？」

返事がないかとも思ったが、わりとハッキリとした威厳のある声が返ってきた。

「ふむ、そうか。自身で出向くまでもないと、東の魔女はそう判断したのかね」

「とうか使いつ走りだ。俺だって不本意だったの」

「貴様だけでワシを倒せると？」

「さあな。だが真意は聞かせてもらおう」

言いながら俺は駆け出し、杖の変形コードを唱える。

《切り裂け》

瞬時に片方のペンダントトップが右手で白色のサーベルになる。

そのままもう一つ起動コードを唱えてもう一方の形状も変える。

《纏え》

もう片方のペンダントトップが黒いガントレットになり、左腕に装備される。

「面白いな、小僧！」

老人は傍らにあったステッキを掴み、俺と対峙する。

《暗闇より出でし獣よ》

老人が唱えると、不定形な黒い獣が無数に現れる。

「あーもうっ！　いきなり使役系魔術かよ」

さつき老人が呼び出した獣の魔法の痕跡から読み取り、すぐさま対応する。

「剣では威力がイマイチだから……」

《闇を穿つ閃光》

瞬時に左手から放たれた光が黒い獣と次々に相殺する。

「甘い小僧。ほれ、まだ残っておるぞ」

打ち落としきれなかった獣3匹が俺に向かってくるが問題ない。そのままサーベルを振ると、そこから発生した衝撃波の刃が獣を全て切り裂く。

詠唱、魔法陣などをその都度準備せずに発動させた魔法にはさすがに向こうも驚いたようだ。

「どういう仕組みだ、今のは？」

「さすがに、今のはアンタでもちよつとは驚いたか」

ケリュケイオンに付けたもう一つの機構、クイックロード瞬時詠唱。

使用する魔法の魔術式をあらかじめ杖に入力しておくことで、詠唱や魔法陣無しでの魔術の行使を可能にしているのである。

ただし、通常使用時と比べると多少威力が落ちるのが欠点。

「次はこつちから行かせてもらう！」

《切り裂け》

左腕のガントレットもサーベルに変え、瞬時詠唱した魔法で加速して切りかかる。

「いい動きだ。だが、対応出来なくはないな」

老人はギリギリのところまで全ての攻撃を防ぎ、そのままステッキで突きを放つ。

必要最低限の動きで行われた防御と反撃にはまるで隙がなく、俺はもろにその突きをくらった。

「がっ……はアッ」

老人の細腕から放たれたにしては強すぎる力に、俺の体は部屋の壁に激突してやっとなと止まる。

「くそッ、何だ今の!？」

「確かに前よりは賢くなったようだが、その程度では当てる事すら不可能だ」

言うのが早いか、老人はそのまま次の攻撃に入る。

《雷獣の箱庭》

直後、バチバチと周囲の空気がスパークし始める。

今度はそこから雷の獣が5匹と紫電の檻が俺の周囲に出現する。

「箱庭”ねえ……まったく、綺麗な血の花が咲きそうだ」

そんな皮肉を言いながらも、俺は冷静に攻撃の対応に移る。

両手のサーベルを眼前でクロスして構え、形態を変化させる。

《阻め》

両手のサーベルがその姿を大盾に姿を変えた直後に次の式を組む。足で地面に三角を描き、その中心をバンツと勢いよく蹴りつけて詠唱する。

《拒式の法》

その瞬間俺の周囲の魔力が嵐のように荒れ狂い、雷の術式をバラバラに砕いてしまう。

「なるほど、周囲の術式を丸ごと消し飛ばすか、考えたな」

「どうせあの技、獣を潰すごとに分裂して増えるんだろ？ なら消すのは檻の方だ」

「よい判断だ、確かにあの雷獣は敵の攻撃で増える。しかし何故それがわかったのかね？」

「ちよつと目がいいだけだ、あとは勘つてとこかな」

拒式の法は確かに強力だが、発動に要する時間に難がある。

下手をすれば今ので片腕ぐらいはやられていたかもしれない。

《囁け》 《纏え》

すぐさまケリユケイオンを杖とガントレットに変え、攻勢に出る。

《鎖乱》

杖から放たれたのは6本の光の鎖だ。

そのまま鎖は老人に向かって行き、先端の刃物で切りかかる。

「さつきも言ったが、その程度では脅威にはならん」

そう言つて老人はステッキを床に叩きつけ、唱える。

《震空の鎧》

光の鎖は老人の体の手前数センチのところではにかに弾かれた。

鎖はそのまま先端が霧散し、老人の作った何らかの防壁と融合、侵食し始める。



「悪いがそつちはフェイクだ。本命はこつからだよ」  
「なっ!？」

俺は鎖乱の追加詠唱を行う。

《縫い付ける、鎖乱》

すると、完全に鎖と融合した防壁から無数の針が老人の体を貫く。  
老人は悲鳴を上げ、そのまま倒れる。

「ぐっ、まさか、二段構えの、式……だと!？」

「最初からこれが狙いだよ。もう術の効果で動けはしないだろ？」  
鎖乱は攻撃が目的ではなく、相手の動きを縛る呪い。

体中を呪いに貫かれ、動けない老人は諦めたような表情をしていた。

「さあ小僧、殺せ。私の罪は、私の命で償おう」

死して罪を償う、老人はそう言った。

だが、俺は

「ふざけんな、誰が人殺しなんかするかよ!!」

「何だと? なら、何故こんな呪いで私を縛る!？」

「最初に言つたら、真意は聞かせてもらうって。アンタの目的が何なのか、それを調べるのが俺の目的だ」

呆れたような顔をしながら老人は少しずつ語り始めた。

「私は、家族にもう一度会いたかったのだよ。そのために、神の魔力が必要だったのだ」

「つまり目的はミストや俺って言うより、アーヴルロアの魔力ってことか」

しかしこれほどの魔術師が、家族に会うためだけにそんな物を欲しがる理由が俺にはわからなかった。

「私は、一度死んだようなものなのだよ。今の体は、ほぼ全てが魔法で出来ている」

「どういう意味だ!? 確か、人を魔法に変えるのは禁忌だっ…」

「私は、元はそれなりに有名な魔導師だった。キリエル・ディア、…」

と言つ名前を聞いたことがあるかね？」

俺はすぐにこの間読んだ本の内容を思い出した。

「ああ、確か使役系魔術の専門家です元1級被<sup>エクソシスト</sup>魔師だっけ？ どこかの本に載ってたな、けど8年前に死んだって」

「書類上は、な。私は、王国軍に人体実験の材料にされたのだよ、ちよつどその頃にな」

王国軍。

その言葉が意味するのはこの世界最大の魔法騎士団。

最も多くの高位魔戦兵が所属する、王国直轄の軍隊のことである。

「私は、知ってはならぬ秘密を知ってしまったのだよ。王国の最も深い闇を」

「それで、何を見た？ 又は聞いた？ そんな事されるような」

「人造人間」  
ホームクルス

俺の言葉を遮るように、老人キリエルは言った。

「王国軍は影で人造人間の生産と殺処分を繰り返していたのだよ。もちろん、そんなものは禁式だ」

「それでアンタはそんな体にされたのかよ！」

信じたくもない話だった。

つまりは口封じの為に殺されたも同然なのだ。

「そうだ。そして私は、術式に禁式を用いているものがあるなどという、でつち上げの罪で捕らえられた。」

「禁式の口封じに禁式行使の罪かよ、笑えない話だ」

だが、とキリエルは続ける。

「人体魔法化は失敗作だったのだよ。魔法化した体は、放置すれば1年程しか持たぬ事は私には容易にわかった」

「だがなんでアンタは今も生きてるんだ？ その話が本当ならもう消えてるはずだろ？」

「この屋敷の力だ。この人形の館は、この部屋の主に膨大な量の魔力をかき集める霊装でな。私は、死に物狂いで完成させたこの霊装で今日まで生きてきた」

そこで気付いた。

キリエルが神の魔力を欲した理由。

それは

「外でも自分の体を保つ為、か。家族に会うために」

「その通りだ。だが、もう叶わぬ夢だ。人形の館もそろそろ限界がきている」

所々綻びかけているこの館は、確かにそう長くは持ちそうになかった。

「でも、諦める必要もねえだろうが！ アンタにはまだ可能性が残ってるだろ！！」

「しかし、私は外に出ればすぐに体が消え始める。それを保つ魔力は」

「俺がいるだろ！ アンタはちよつと他人を頼るべきだ。1人で何でも出来るとか自惚れてんじゃねえよ」

一瞬驚いたような顔をしたが、キリエルはうつすらと微笑んだ。

「小僧が私を外へ連れ出すと言うのかね？ 実体を保つには膨大な魔力が必要だぞ？」

「残念だが魔力の量には自信があるんだよ。それに、やってみなきやわからねえだろ」

和解し、そろそろ呪いを解こうとした矢先、俺の左肩を炎を纏った銃弾が貫いた。

「グッ、がああア」

「小僧！？」

今無防備にしていれば次で殺される。

「クソっ、どこから！？」

《止め》

まだ動く右腕の白いケリユケイオンを盾に変える。

直後、澄んだ声の詠唱が聞こえる。

《拡散Spread》

咄嗟に俺は防御の術式を発動する。

《絶空壁》

飛来した無数の弾丸は不可視の壁に阻まれて止まる。

「誰だか知らねえが、感動の和解のシーンに水を差しやがって!!」  
言っている間にも肩からはボタボタと流れた血が床を深紅に染める。

と、そこへ声が響く。

「へ？ 和解!? 和解ってどういう事ですか??」

落ち着いた感じの女の子の声。

直後に現れたのは、俺とそう年の変わらない少女だった。

紅いビキニの上からデニムのショートパンツと膝上までのソックスと銃のホルダー。

上は半透明のジャケットのようなものと片腕に革のバンドが3本と白い手袋。

1つに纏めた赤茶色の髪を肩の辺りに垂らしている。

「お前かよ、人畜無害な人間の肩を打ち抜いたのはって  
言いかけて気付いた。」

その顔に見覚えがあったからである。

それも

「アンタ、うちのクラスの委員長じゃねえか!!」

「え、あ、あれ? もしかして池上君!? はわ、はわわわ」

何故かあたふたしている委員長。

確か名前は高宮朱里<sup>たかみやあかり</sup>。

「まさか、アンタも魔女の代行者か?」

俺は呆れつつ、キリエルにかけた呪いを解きながら尋ねる。

「も、もしかして池上君も? って私肩撃っちゃってわわわ!」

どうやら俺の肩とそこから流れる血を気にしていたようである。

「大丈夫だ。このぐらいなら」

「で、でも治療しないと血が、血が……」

涙目になりながらこっちを見る委員長にキリエルが助け舟を出す。

「小僧の言つとおりだ。こやつなら心配ない」

俺は肩の辺りにアーヴルロアの魔力を少しずつ集める。  
するとみるみる血が止まり、傷が塞がっていく。

「な、大丈夫だったろ？ てか何でこんな所に？」

「わ、私は、シャウリルに、西の魔女に頼まれて、ここに多分困ってる人がいるからって」

多分てアバウトすぎるだろ！？

とか心の中で突っ込みつつ、俺は恐らく今回の事を仕組んだ犯人共に警告する。

「おいミスト、それにシャウリルって言ったか？ コソコソ隠れてないで出て来いよ、この状況を仕組んだのはお前らだろ！！」

委員長はほえ？とか言いながら気付いていなかったが、キリエルは意味有り気に笑っていた。

「ば、バレちゃったねえシャウ。こっそり見守ってたのにねえ？」

「そ、そうだな、全く勘のいいヤツめ」

わざとらしく知りませんよオーラを出しながら出てきた東西の魔女に威圧的に尋ねる。

「さて、詳しく聞かせてもらおうか？」

「蓮が普段見せないような満面の笑みだよっ！？ 怖すぎるよ！！  
??？」

そこでやっと理解が追いついたのか、委員長がシャウリルに言う。

「へえ、シャウリルは私を騙したんですか。そのせいで池上君を撃つちゃったし……」

「ま、待て、誤解だ！ 別に騙してなんか」

「許しません、知ってるくせに、私が、……池上君のこと……」

「で、話してもらおうか？ ちょっと仕事もあるし手短に」

その直後、二人の魔女が取った行動は単純明快だった。

「「ごめんなさいいいいっ！！」」土下座×2

結局、西の代行者との接触はひどくどうでもいい悪戯のせいで台無しだった。

このあと魔女達は俺が事情の説明に移るまで、数時間にわたって

委員長に責められ続け、シャウリルに至っては失神していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3336u/>

---

parallel gate -the sorcerer legend-

2011年8月14日03時34分発行